

〈居合う〉構えからはじまる
 ——フィールドワークの受動性・偶発性・拡張性をめぐる小論——

Methodological Pending:
 A Consideration of the Passivity, Contingency,
 and Extensibility of Fieldwork

石野 隆美*

要 旨

本稿では、フィールドワークを捉えなおすための二つの視点を提示する。第一に、フィールドワークの本質的な一要素として、受動性に特徴づけられた〈居合う〉構えが見いだされることを指摘する。そこから、具体的な地名や集団名として理解されてきた「フィールド」という実体的な場所・時空間を訪れ、滞在することではなく、特定の態度に貫かれた〈居合う〉構えをとることこそが、行為をフィールドワークとして成立させるものであることを論じる。ある行為がフィールドワークとなったり、ならなかったりするという発想は、明確な始点と終点に区切られたフィールドワークの行為的連続性と、フィールドという時空間の所与性、その双方を掘り崩すものである。そこで第二に、本稿ではフィールドワークが他の研究活動や調査者の生活のさまざまと潜在的に結びついたものであることを指摘し、フィールドワークを規定してきた時間性と空間性を〈手前に引き延ばす〉ことを提案する。フィールドワークとは他者に対する関係性の一つの帰結であり、特定の構えであり、それゆえに「現地に行くことができない」というこんにちのフィールド

* 立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程、日本学術振興会特別研究員（DC2）

ワーク状況を肯定的に捉えかえすための理論的な可能性を内に秘めたものである。

Abstract

This paper examines two perspectives to rethink fieldwork. First, this paper points out that one of the essential components of fieldwork is the *pending=waiting* posture, which is characterized by passivity. It is criticized the concept of “field” which has been understood as a specific local place or specific group. This paper argues that visiting and staying in a substantive space-time is not what defines fieldwork, but that taking a posture of *pending=waiting* is what makes research activities and daily acts as fieldwork. The fact that something may or may not become fieldwork demolishes both the continuity of fieldwork, which has a definite beginning and end point, and the given time and space of the field. Secondly, this paper points out that fieldwork is potentially connected to other research activities and various behaviors of the researcher. Finally, the importance of stretching the space-time dimension of the concept of fieldwork is argued. Fieldwork is a consequence of one's relationship to the other, a specific posture, and therefore has theoretical potential for a positive reinterpretation of today's situation.

キーワード：文化人類学的フィールドワーク、受動性、偶発性、構え、居合

Key words : anthropological fieldwork, passivity, contingency, posture, pending/waiting

1. 人類学的フィールドワークの力点と〈居合う〉構え¹⁾

1.1 可能性に満ちた悪あがき

調査対象の人びとの生活に身をおき、人びとの息づかいや感情、ふるまい、思考や物事の捉え方を自らの身に引き受けながら、人びとが世界を生きるそのありようを五感をつうじて理解しようとする。本稿で議論する文化人類学的フィールドワークは、単純に言えばそのように説明することができるだろう。調査対象の人びとはしばしば「他者」と表現されるが、一見してきわめて異質・異様にみえるような「他者」の実践に出会ったとして、それを「文化が違うから」の一言で納得しようとするような態度は、あるいは特定の理解の枠組みにその「わからなさ」をカテゴライズし、理解したつもりになることで獲得される安堵に浸るような態度は、問題含みである。前者は、安易な相対主義による対話の断絶に帰結する。後者は、「私たち」がもちいる思考の枠組みに依拠して他者を他者として固定化し、人びともまた私たちと地続きの地平に生きているという事実気づくために必要な想像力を、自ら手放してしまうものだ²⁾。「他者」と「私たち」。このあくまで暫定的に用意されるにすぎない二者間に広がる、差異と共通点（のようなものとしてあらわれるもの）を丹念に模索しつづけること、その流れのなかで析出される「他者」と「私たち」を捉えようとする、そして、そのような地道な実践の末に獲得したパースペクティブをもって、世界をまなざしかえすこと³⁾。人類学的フィールドワークの力点はそのようなところにあると思われる。

こんにちのフィールドワークが問題としていることのひとつは、フィールドワークをつうじて獲得される身体と結びついた視点と知が、物理的・身体的にフィールドに行くことができない現状においてはたして獲得可能なものであるのかという問いである。また、それがもし可能だとするならば、それはどのようにして可能であるのか。

新型コロナウイルス感染症の影響下、オンラインアプリケーションをもち

いたフィールドワークを軸に、対面での調査の代替となるようなフィールドワークの方法とその可能性が模索されつつある。たとえば Deborah Lupton は、Google Docs に“DOING FIELDWORK IN A PANDEMIC”と題された文字資料を共有し、移動できない状況における調査の遂行・継続方法を列挙・整理している (Lupton, 2020)。この資料は他の研究者も情報と記述を追加することが一時期まで可能だったため、方法論ごとに、記述を加えた研究者の名前が明示されている。項目は多岐にわたり、調査対象者自身が写真やビデオ、音声記録装置をもちいて自らの日常生活を記録し、それを調査者に共有してもらうエリシテーション (elicitation) の手法や、調査対象者に日々の記録を文字で書き残してもらうダイアリー／ジャーナリング (diaries/ journaling)⁴⁾、Google Forms を用いた情報収集 (using Google/ Microsoft Forms for data collection)⁵⁾、オートエスノグラフィ (autoethnography)⁶⁾、YouTube をもちいた参与観察調査⁷⁾ など、数十項目の調査手法とそれぞれの関連文献、注意事項などが共有されている。とくにオンラインインタビューについては、技術的な課題が調査者・被調査者双方に生じる可能性の高さや、通信環境・実施環境・時差などの要因によって意思の疎通が難しくなる可能性について指摘がある。オンライン上でインタビューを円滑に進めたり会話を盛り上げたりするためには、調査者側に一定のテクニックやノウハウが求められ、それがラポールの形成に影響する可能性もあるという。

本稿は、そうしたオンライン上のインタビューに関する議論を視野にいれつつも、それらの方法論的な検討は行わない。代わりに、理論的な道具をもちいて、フィールドワークという営みを構成する本質的な部分について省察し、フィールドワークを捉えなおす作業を行う。とくに本稿は、フィールドワークにおいて「フィールドに行けないという事実」がどれほどの重みをもつのかについて——いづれから楽観的な見方によって、あるいは悪あがきとして——検討を付すものである。

結論をやや先取りするが、本稿では次の二点を強調する。第一に、フィー

ルドワークの本質的な要素の一つに、〈居合う〉構えなるものが認められるという点である。それを特徴づけるのは、フィールドワークという営みに内在する、ある種の受動性である。フィールドワークという営みは、明確な調査計画や目的のもとで作業工程を一つずつ達成していくような、計画的・作業的なものではない場合がほとんどである。それはむしろ、フィールドに生起する予測不可能な「出会い」や偶発的な出来事に身をゆだね、変化の流れのなかで目の前の現実を観察・記述していく営みであることが指摘されている。この受動性は、フィールドのなかにおいても、フィールドにたどり着くまでのプロセスにおいても見いだされるものである。フィールドに「行く」こと、そしてフィールドに「いる」ことその双方において無視できない受動性を引き受けること。その構えを〈居合う〉という表現において整理したい。

第二の点は、フィールドワークにおいてフィールドという具体的な「場」を決定的に重要な要素とみなしてきた主流の見方について、多少の修正をうながそうとするものである。フィールドワークという営みの始点と終点はどこに認められるのか。それはそもそも認められるのか。「フィールド」とはどこ／何なのか。これらの問いかけをしながら、本稿はフィールドワークという営みを、フィールドに「行く」あるいは「いる」という特定の時間軸と行為に規定された理解から、より〈手前に引き延ばす〉ことを試みる。これは、「フィールドに行くことができない」という現時点での「私」の立場がもつ意味を、より肯定的に捉えかえすための悪あがきとなるだろう。

1.2 なぜ「構え」なのか

人類学的フィールドワークとは、「他者像の完成」を可能な限り遅延させようとする営みにほかならない(cf. 細見, 2021)。それは他者に対する自己の理解と自己開示を、そして自己に対する他者の理解と開示を真摯に受け止めつつも、その暫定性・一時性につねに自覚的にありつづけるような態度であり、実践であるといえる。この意味で、フィールドワークとは特定の場＝

フィールドに行くことに集約されない。先に述べたように本稿は、特定の場所やその場所への移動ではなく、何かを実践する際の態度＝構えこそがフィールドワークを規定することを強調する。それは人類学者・菅原和孝が述べた「人生至る所にフィールドあり」という言葉と通底するものだと考えている(菅原, 2006 p.1)。この言葉が述べられた書籍『フィールドワークへの挑戦』(2006年、世界思想社)で菅原が問うのは、文化人類学的フィールドワークが、それを実践する人びとの「生」においていかなる意味をもつのかというものである。

(中略)、フィールドワークが〈わたし〉にとって意味をもつのは、その実践が、〈わたし〉の「生のかたち」への絶えまない問いかけへと内在化されるときである。人類学がめざすフィールドワークがそのようなものだとしたら、わたしたちはべつに、どこか遠い土地へおもむく必要はない。やや思いきった言いかたをすれば、フィールドワークとは、「知の技法」であるよりも前に、「生きかた」の問題なのだ(菅原, 2006 p.3 傍線引用者)。

やや情緒的かもしれない記述ではある。また、フィールドワークという実践を「わたし」すなわち調査主体の「意味」へと還元してしまうことに、問題がないとは言い切れない。付け加えれば、すでに人類学的フィールドワークの対象は「どこか遠い土地」を前提としたものでは必ずしもなくなっており、特定の現象や関係性、そしてそれらのダイナミズムそのものを「フィールド」と捉えるような人類学的研究の増加もみられる⁸⁾。だがそれらを念頭においたうえでなお、菅原の説明はフィールドの「非規定性」を的確に言い当てているという意味で、重要だと思われる。「遠い」場所にせよ近い場所にせよ、あるいは何らかの現象そのものをそう捉えるにせよ、フィールドは、いつでもどこか特定の場所に——他所と区別されるかたちで——存在する

ような、確固たる「場」ではない。菅原の説明が明らかにしているのは、フィールドはいついかなる場所においても、特定の意味をもつかたちで〈わたし〉の目の前に「あらわれる」ものだということである。むしろ、そのような「あらわれ」を引き受けようとする態度こそ、フィールドワーカーを定義づけるものなのではないか⁹⁾。

ところで、フィールドワークのマニュアル化の難しさについては、人類学的なものも含め、多くのテキストで言及されている (e.g. 市野澤・碓・東編, 2021; 椎野・白石, 2014)。フィールドにおいて生起しているのは、フィールドワーカーと同じく日々を生きる人びとの生活世界であり、実践であり、関係性である。昨日と全く同じ一日を過ごすことが不可能であるように、そこにはどれ一つとして「再現性」あるものはない。明日どのように過ごそうかとどれほど綿密に行動予定を立てたとしても、その通りに事態が運ぶ保証はどこにもない。フィールドワークにおいて身を置くのは、そのような場にほかならない。当然、先人がなしたフィールドワークを自らにして再現することも不可能だ。

つまりフィールドワークは、徹底して個別具体的な文脈にもとづいた営みであり、その蓄積である。しかし、あるいはだからこそ、抽象的な枠組みがその根底に準備されていなければならない。フィールドワーカーは、具体的な現象を事細かに調べ、自ら参加し、なんとか記録に残そうとする。そうした小さな観察と発見の積み重ねが、フィールドワークとその成果物の「記述の厚さ」を左右してゆく。フィールドワーカーの眼前で生起する出来事の多くは、個別具体的な文脈のなかでその場限り生じるような、一回的な経験である。それらを「知る」ための方法論は決して具体的な形でマニュアル化できないがゆえに、具体的な行動の指針となるような抽象的な「型」(碓・市野澤, 2021 pp.5-6) や「コンセンサス」¹⁰⁾ が必要となる。

碓陽子と市野澤潤平は観光人類学のフィールドワークに関するテキストのなかで、フィールドワークの「型」を、「ある種の慣例であり、スポーツ

における基本動作や戦術理解のようなもの」とし、決して予測どおりには進まないフィールドワークのなかでは——むしろ、だからこそ——フィールドワーカーが逐一立ち返り、自らの行動と対応方法をそこから導き出すことができるような、基盤としての「型」が重要となると述べている（碓・市野澤, 2021 p.5）。この「型」の考え方について、フィールドワークの本質的要素としての受動性のニュアンスを組み入れた「構え」という言葉をもちいて説明しなおすことを、本稿では試みる。

2. 受動性とフィールドワーカー

フィールドワークという営みは、その遂行にあたって多くの物理的・身体的なリスクに直面しうるものである。だが、そうした事実は成果物の「あとがき」で語られることはあれ、主題として論じられることは少ない傾向にある。澤柿壮一郎と椎野若葉は、この現状について以下のように述べる。

フィールドワーカーは、(中略)世界各地のさまざまな文化や環境に赴き、(中略)奮闘する。しかし、その行き先にはさまざまな危険や困難が待ち受けているのが常である。時には退却や断念の決断を迫られることも少なくない。こうした問題を一つ一つ克服した先によりやく成果が得られるのだが、そのためにどのように、準備し、危険を回避し、困難を乗り越えたか(あるいは失敗したか)、ということが成果物のなかで述べられることは、まずない。成果物として公表されるものには、すくなくならず「生存バイアス」がかかっている、のだともいえよう（澤柿・椎野, 2020 p.4 傍線引用者）。

フィールドワークという営みが、すべてフィールドワーカーの意思や計画に沿って進行するとは限らない。そして災害や事故などの予測不能な事態に

よって、フィールドワークのための移動がそもそも不可能になることもあるだろう。また、研究・教育機関に身を置く職業的フィールドワーカーは、学事日程や学内業務との関係のなかで自らのフィールドワークを計画しなければならないのが常である。そうでなくとも自身の健康状態や経済的な事情、家族との関係によってもその時期や期間が左右されうるなど、フィールドワークを遂行するために考慮しなければならない要素はじつは少なくない。フィールドワークは、一定の制約や条件と折り合いをつけながら実践されなければならないものなのである。

だがそれらの問題を乗り越え、いざフィールドに降り立ったとしても、フィールドワーカーは自らの思い通りに事態を運べるわけではない。フィールドワークを体系化させ、その指南書として読まれる『西太平洋の遠洋航海者』¹¹⁾を著した文化人類学者 B. Malinowski は、そこで次のように述べる。

あなたが突然、住民たちの集落に近い熱帯の浜辺に置き去りにされ、荷物のなかになた一人立っているとご想像願いたい。あなたを乗せてきたランチか小舟はすでに去って影も見えない (Malinowski, 1922/2010 増田訳 p.33 傍線引用者)。

これは『西太平洋の遠洋航海者』の序論、第3節冒頭で記述される内容である。「民族誌学的フィールドワーク」の方法論的問題について、彼が滞在したトロブリアンド諸島の経験とともにこれから説明しようとする、その第一歩のシチュエーションとして読者に設定させるのが「浜辺に置き去りにされ」た状況なのは示唆的である。

Malinowski は「民族誌的調査にふさわしい生活環境」として、「白人の世界から自分を切りはなすこと」、「可能なかぎり現地住民と接触すること」を挙げ、フィールドワークは「彼らの集落のまっただなかにキャンプを張ってはじめて達成される」ものであると述べる。そして近隣にある白人居留地

——「病気のときや、住民たちに飽きがきたときの逃げ場所」——からは一定の距離を保つべきであるという (Malinowski, 1922/2010 増田訳 p.37)。

興味深いのは、このようにして語られるフィールドワークの手法が、じっさいには Malinowski にとって「理想化」されたフィールドワーク像であったことが指摘されている点である。文化人類学者・浜本満は、彼の日記 (Malinowski, 1967/1987 谷口訳) の分析をつうじて、Malinowski が頻繁にかつ長期にわたって白人居留者の敷地に「逃避」していたことや、彼が物質的にも精神的にも居留地に支えられていたこと、特定の現地の知人 (トロブリアンダ諸島のジンジャーなど) に情報提供者としてのそれ以上の依存をしていたことなどを明らかにしている (浜本, 2005 pp.81-83)。

フィールドにおいて何かに精神的・身体的に依存したり、いくばくかの逃避を試みたりすることは、多くのフィールドワーカーにとって馴染みある経験といってよいかもしれない。言い換えればフィールドワークは、フィールドの環境に振り回され、不自由やハプニングに向き合いながらも、「なんとかやっていく」作業の積み重ねなのである。それは、事前の調査計画通りに能動的にプロセスを進めるようなフィールドワーク像とは対極的である。

受動性と呼ぶべきものをフィールドワークが本来的に内包していることは、すでに指摘されつつある。たとえば『生き方としてのフィールドワーク』(中尾・杉下編, 2020) では、さまざまなかたちでフィールドに巻き込まれ、調査者の意思の外側で進行する関係性に身をゆだねてきたフィールドワーカーたちによる報告が集められている。序論では次のように語られる。

人は皆、自らの意思とは無関係に生じる出来事に流されながら、あるいは抗いながら、ままたらぬ人生を生きているのである。人類学者にとり、フィールドワークは、そのような人生と地続きである。時間と空間を区切り、明確な問題意識を携えてフィールドに赴いたとしても、計画通りに事が進むわけがない。フィールドで出会う人々もまた、人類学者

と同様にままならぬ人生を抱えているのであり、両者は学術調査を越えた関係性のなかで互いの生を揺さぶる。そうした受動性のなかで、人類学者は立ちすくんで懊悩したり、自己と他者のつじつまを合わせたり、寄る年波に慨嘆したりしながら、フィールドワークが埋め込まれた人生を生き、そのことに意味を与えようとしている（中尾・杉下, 2020 pp.12-13）。

「受動性のなかにあるフィールドワーク」（中尾・杉下, 2020 p.12）。フィールドワークのこの側面は、成果物のあとがきや懇親会で語られることはあれ、正面から主題化されることは決して多くない。

本稿が述べる〈居合う〉構えとは、この受動性を正面から積極的に引き受けようとする態度にほかならない。まさに待ちの姿勢であり、あるいはそれは、宙ぶらりんになることである。フィールドワークにおいて必要なのは、目前で起きている物事に対してつねに自己を開示すること、フィールドワークで生起する関係性のダイナミズムが自分に向かってくるよう、辛抱強く仕向けることなのではないか。これは、フィールドワーカーが向き合いつづけてきた受動性や不自由、偶発性（本稿ではこれを後に批判的に検討するが）を、制約から契機へと読み替える試みである。〈居合う〉構えとは、積極的に受動的になる実践であり、そのための態度である¹²⁾。

本稿では、この〈居合う〉構えこそがフィールドワークを特徴づけ、定義し、生みだすものであることを論じる。またフィールドワーカーとは本来的に「欠けた」存在であり、ゆえに他者とともに〈居合う〉ことによってはじめて成り立つ存在であることを指摘する。それらを議論するための準備として、次節ではまず、フィールドワークにおける偶発性に関する批判的な考察を行いたい。

3. 偶発性の教義

フィールドワークにおける偶発性は、やや肯定的に語られてきた側面があるように思われる。調査者が抱いていた固定観念や「当たり前」にふいに揺さぶりをかけてくれるようなものとして（桑山編, 2021）。あるいは、予定調和で結論のすでに設定された学習方法を脱却し、予測不可能性の高まる社会状況のなかで臨機応変に自己を変容させながら柔軟に生きる術を学ぶ者に気づかせてくれるような、表情豊かなフィールドの特質として（箕曲・二文字屋・小西編, 2021）。フィールドは偶発性に満ちた時空間であり、調査者はその偶発性と辛抱強く向き合いながら、自己の問いを発見したり、問いを更新したりしてきたとされる。

ここでは、フィールドワークにおけるこの偶発性の概念を、やや批判的に捉えなおしてみたい。フィールドにおいて、「偶発的なもの」と「偶発的でないもの」はどのようにしてフィールドワーカーに認識可能なかたちで現前するのか。いや、そもそも「偶発的でないもの」すなわち予測が完璧に可能であり、計算可能であり、必然として理解可能なものや現象など存在するのだろうか。偶発性を確認する思考は、どのような機序によって自然化されるのか。

フィールドワークにおいて、偶発的でないものとは何だろうか。調査計画通りにインフォーマントが見つかり、順調にインタビューや参与観察が進むこと、観察対象となるような現象が滞りなく目の前で繰り返されることだろうか。あるいは、何かの事物をインフォーマントに贈与した時に、期待通りに感謝の意を示されたり、返礼を受けたりすることだろうか。だが、偶発的でないもの、いかえれば規則通りにはたらき、特定の結果を繰り返し生み出すようなものが仮にあるとして、しかしそのような機構は——J. Butler にならうならば——必ずその機構の内側においてパフォーマンスな「攪乱」が引き起こされるものでもあることを、思い起こす必要があるだろう

(Butler, 1990/2018 竹村訳)。

偶発的なものと名づけられ、呼ばれ、形容されるあらゆることからは、単にその対象を名づけた者の想像の範疇からあらかじめ排されてきたものに過ぎないのではないか。偶発性が、フィールドワーカーの脳内で事前に予測され構築された物語との距離を指し示すものである限り、すなわちフィールドワーカーの予測可能性 (predict-ability) の限界を自ら示しだしながらそれを隠すような表現である限り、フィールドにおける出会いや驚きに満ちた発見、それによる自己変容は自作自演となってしまう可能性があるのではないか¹³⁾。

たしかに、「偶発的なもの」として感受されうる出来事を、実際のフィールドワーク中に経験することはあるだろう。しかしそれを単に偶発性として指摘したり、記述したりするだけでは十分ではない。必要なことは、偶発的なものとの出会いをフィールドワークの目的として設定する偶発性の教義ではなく、つねに自らの予測可能性の限界に自覚的であり、前もって知ることのできない複数のパースペクティヴの存在につねに自らを開示する態度だと思われる。本稿のいう〈居合う〉構えは、フィールドワーカーとしての自己の不完全さを意識的に引き受け、それによってフィールドにおける現前を内省と次なる未知に開かれたかたちで受け止めようとする心構えにほかならない。

4. フィールドワーカーという未完の主体

フィールドワーカーは、その場所に何か自分の知りえないものがあるという予感を抱きつづける存在であるという意味で、本質的に不完全で、構築されつくしていない、完成されない主体である。そして未完の主体であるからこそ、他者と交わり、他者ととともに考え、生きることができるとする潜在力を秘めるのである。フィールドワーカーのこの未完性、あるいは部分性こそが、自

らを関係性の「結節点」へと変換し、「他」へと自らをひらき、他者と、フィールドと、出来事と自分自身とを結びつけることを可能にしているとはいえないか。

〈居合う〉構えとは、このようにして部分的な自己を開示し、「他」なるものを待ち受けることによってはじめて可能となるようなフィールドワークの本質的要素を説明するものだ。そして筆者はこの構えが、人類学者T. Ingoldの述べる「with」¹⁴⁾のニュアンスを実践するために必要なものだと考えている。

Ingoldは人類学とアートとの関係について考察するなかで、「○○の人類学」「○○についての人類学」を「○○とともにある人類学」へと置き換える必要性を主張する(Ingold, 2013/2017 金子・水野・小林訳 pp.26-33)。「○○の／についての人類学」は、○○に入ることがらを人類学的な研究「対象」として位置づけることを前提とする。それは「対象」を、一覧可能なカタログとして固定化する。あるいは、文化的コンテクストの内部で／との関係で解読されることを待つような、不動の展示物として客体化する。そのような対象化は、人類学がその対象について何かを読み解くことは可能とするかもしれないが、対象自体が関係性のなかで変化し、人類学に対して何かを訴えかけてくるその挙動についてはことごとく見逃してしまうこととなる。

人びとに「ついて」の人類学はまた、そこに行きさえすれば何かがわかるといったふうに、フィールドに実際に行くことを神格化するような「対象」設定にも結びつきかねない。そのような「対象」は、「現地調査という実践のなかで知りうる何かとして想像された社会、文化像」(浜本, 2005 p.75)にほかならない。「研究対象としてそれを設定することそのものが、その具体的な内容がどうであれ、社会や文化を、あたかもいろいろな角度から観察したり調べたりできるような実体的対象、一つのまとまったオブジェであるかのように想像するように暗に仕向けている」(浜本, 2005 p.72)。その思考においては、そこに「行く」ことと、その場所について「わかる」こととのあ

いだに広がる途方もない断絶について、問われることはない。

それでは「〇〇とともにある人類学」はどうだろうか。Ingold はアート为例に、以下のように述べている。

アートとともにある人類学は、まず第一にアートというものを、わたしたちの感覚を呼び覚まし、人生の移り行きのなかで、人間存在の内側から知識を成長させてくれるような、人類学と共通の関心をもつ領域とみなす。アートとともに人類学をおこなうことは、遡及的ではなく未来にむかう読解のなかで、アート自体の成長や生成の動きにみずからを応答させ、アートが進む進路に沿っていくことだ (Ingold, 2013/2017 金子他訳 p.29)。

また、別の場所で Ingold は、人類学という営み、そして参与観察という調査の営みが、「人々についての研究を生み出すというよりも、むしろ人々とともに研究する」ものであると述べる (Ingold, 2018/2020 奥野・宮崎訳 p.16 傍線は原文の強調箇所)。しかもそのやり方は、単純な観察とはニュアンスが異なる。「あらゆる研究は観察を求めるが、人類学では他者を対象化するのではなく、他者に注意を払うこと、つまり他者がすることをよく見て言うことをよく聞くことによって観察する」(Ingold, 2018/2020 奥野・宮崎訳 p.16) のだ。Ingold はこうも述べる。

(人類学的な) フィールドワークとは互酬性の土台の上に築かれた原理であり、互酬性とは、与えられないものを偽ったりごまかしたりして得ようとするのではなくて、与えられたものをありがたく受け取ることである。(中略) フィールドでは、事が起きるのを待たなければならないし、何かを提供された時にはそれを受け取らなければならない(Ingold, 2018/2020 奥野・宮崎訳 p.17 括弧内の補足および傍線は引用者)。

このニュアンスからは、世界から何かを引き受ける存在として、受動的な性格を帯びたフィールドワーカーの姿を想像することができる。そのように他を引き受ける態度があつてはじめて、他者と「ともに」学ぶ契機が築かれるのである。そして他者と「ともに」学ぶ態度とは、フィールドワーカーがフィールドワークをつうじて既存の理解を更新したり、調査される側の人びとの世界の捉え方や解釈の仕方を明らかにしたりする作業とは異なるものである。それはむしろ、世界そのものの構成の変化について「ともに」考えることに接近する。

誰かと「ともに」考えることは、誰かと〈居合う〉ことから始まる。「ともに居る」状態こそが、そこから何らかの共同作業が始まるという予感を互いに抱かせる。この意味で、人は単独の存在者としてのフィールドワーカーにはおそらくなれない。フィールドワークは、自らを関係性の網の目とすべく積極的に受動的な構えをとり、誰かと／何かと〈居合う〉ことをじっと待つことからはじまる。逆に言えば、フィールドワーカーという主体は、誰かと／何かと〈居合う〉ことによって生じる関係性の帰結なのであり、自らの補完を待ちつづける主体なのである。

5. フィールドワークを〈手前に引き延ばす〉

時間や空間で区切られていたフィールドワークの境界はいまでは失われつつある。「続きは空港に着いたら、チャットしようぜ」などと聞き取り調査は容易に国境を越える。調査時期が合わずに観察できなかったイベントも、「行きたかった」とつぶやけば、イベントに参加した親切な友人からビデオコールでライブ映像が届く。学会参加中にふと思いついて、WhatsAppのグループページに質問を投げれば、一時間もしないうちに数十人から回答が寄せられる（小川, 2017 p.127）。

これは人類学者・小川さやか自身のフィールドワークの経験に関する記述である。SNSやICTをはじめとするオンライン上の情報交換プラットフォームが世界中で活用されているこんにちでは、誰もが自分自身について、あるいは他者についてなにがしかを語り、記述し、記録に残すことができる。小川は、そうした「つぶやき」や「チャット」のやりとりを「エスノグラフィの断片」として捉えようとする。フィールドの人びとがオンライン上で交わすやりとりのなかに小川自身も足を踏み入れ、断片的な情報の生成と消滅のダイナミズムを取り込んだ、新しいエスノグラフィのあり方を構想してゆく(小川, 2017; 2019)。

当然、オンライン上のやりとりは、人類学者がフィールドにいないときでも進行しつづける。フィールドワーカーは、自宅にいるときでさえ、フィールドの人びとから話しかけられたり、逆に小川のように質問を投げかけたりすることができるようになってきている。小川は述べる。「いまやソファで寝転がりながら、日常的にフィールドの人々と交流しているのだから、リモートでも有効な調査研究を構築できるのではないか。ICTを活用した新しい調査手法とエスノグラフィは、それまでの参与観察を基盤とする人類学の実践にどのような可能性をもたらすのだろうか」(小川, 2021 p.242)。誰もがそうしたオンライン上の関係性を構築できるとは限らない、という懸念はあるにせよ¹⁵⁾、小川の指摘はフィールドワークの質的な変容に関する重要な説明をしていると思われる。すなわちフィールドワークは、あるいはフィールドワークを含む一連の研究活動は、こんにちにおいて断片化しているのである。小川は本章冒頭の引用のあと、以下のようにつづける。

先行研究の読解、調査計画の立案、フィールドワーク、分析と考察、論文の執筆のプロセスが細切れになり、そのすべての思考のプロセスに被調査者がコミットするようになった。私のオーサーシップはますます曖昧になった。気がつけば、人類学者が他者の文化を一方向的に表象する

権力性をめぐる問いは新しいステージに入っていた(小川, 2017 p.127)。

この重要な指摘は、フィールドワークを、フィールドに到着するという「始点」と、フィールドから帰還するという「終点」とが明確に規定されたものとして、その二点を途切れなく進行してゆくような営みとして捉えることの限界を提示している。小川が述べたフィールドワークの断片化は、フィールドという時空間に連続して滞在するという従来のフィールドワーク像から距離をとり、フィールドワークという営みの実態を——多くのフィールドワーカーが、所属する大学や研究機関のカリキュラム編成、家庭環境、さらには婚姻や自身／パートナーの出産といった、ありとあらゆる要因に左右されながら断続的なフィールドワークを繰り返しつつきてきたはずであることを、また人類学的フィールドワークを体系化した Malinowski でさえ、母国には帰国できずとも調査地近隣の米軍駐屯地にしばしば「逃避」していたこと¹⁶⁾を、ここで再び想起しながら——より精確に見つめなおすきっかけとなる議論だと思われる。

ならば、この状況において必要な作業の一つは、フィールドワークを定義づけてきた時間的・空間の実体性を問いなおすことであろう¹⁷⁾。フィールドワークの断片化が意味するのは、フィールドワーカーのあらゆるふるまいが、それがなされる場所と時間にかかわらず、フィールドワークとつねに結合しうるということである。フィールドワークは、それを拡張可能・接続可能な営みとして捉えなおす理論的可能性を内包している。

碓陽子と市野澤潤平は、調査者による事前の先行研究収集や問題意識の位置づけ作業、そして事後のデータ整理や分析、論文／エスノグラフィの執筆までを射程とする幅のある営みとして人類学的フィールドワークを捉える視点を提起している(碓・市野澤, 2021 p.4)。テーマ設定やフィールドに関する情報収集、フィールドへの移動中の思慕、そしてフィールドワークを終えてその経験を思い出してデータ化したり、論文にまとめたりする作業や、

成果物をフィールドの知人に郵送したりする作業もまた、フィールドと、そしてフィールドワークという営みと切断されたものではない。フィールドから帰還した後の日常生活や研究活動——他愛のない世間話から、読書、大学のゼミでのディスカッションなど——のなかでふと、フィールドで経験した現実に関する新たな気づきを獲得することもままある¹⁸⁾。成果物を現地に還元することや、調査地の人びとと人間関係を継続していくこともフィールドワークの重要な一側面であることはいうまでもない。

このようにして、研究の一連のプロセスを広い意味でのフィールドワークとして捉えることや、断片化したフィールドワークと潜在的に結びついたものとしてあらゆる行為を考えることが可能であるならば、フィールドワークとは究極的には、他者との関わり方の形態の一つとして理解されるべきものとなるのではないか。フィールドという特定の時空間に身体を移動・滞在させることは、フィールドワークの一部にすぎない。行為やふるまい、他者との関係のあり方をフィールドワークと結合させ、断片的にフィールドワークとして立ち上がらせることのほうがよっぽど肝心なのである。その発露は、本稿で述べてきた〈居合う〉構えの実践や、あるいはIngoldの述べる「ともに」学ぶ姿勢によってうながされるものだ。

フィールドという具体的な場所に物理的に滞在することの外側に位置づけられてきた多様な実践をフィールドワークと連続的に捉えるためには、従来のフィールドワーク像を〈引き延ばす〉¹⁹⁾ が必要である。なぜなら、そのように視点転換を図ることではじめて、「フィールドワークに行くことができない現在」という経験を「いつか訪れるフィールド経験」と潜在的に結びついたものとして捉えかえすことが可能となるからだ。それは、フィールドに行けない現在において取り組むほかない作業——オンライン上でのインタビューや人間関係構築の試行錯誤など——を「フィールドワークの内部に引き込まれた実践」として連続的に捉えていくことにほかならない。いま、フィールドワーカーが引き受けなければならないのは、現地に行くこと

ができない絶望ではない。いつ、いかなる場所において現前するかもしれないフィールドワークの時間的・空間的な経験の可能性につねに〈居合う〉構えを保持し、フィールドワークの実践を〈手前に引き延ばす〉ことである。

もう一つ意識すべきは、Ingold が述べたように、〈手前に引き延ばされた〉フィールドワークとして実践されるものもまた、他者と「ともに」なされる行為であるということだ。たとえばオンライン上のインタビューであっても、それは画面上の被調査者「について」の作業ではない。画面上の他者と「ともに」進めていくべきプロジェクトなのである。このように考えれば、オンライン上で試行される関係構築やインタビューの実践は、調査者と被調査者とが「ともに」コミュニケーションのありかたを作り上げていくプロセス、あるいはそのはじまりとして立ちあらわれてくるのではないか。

この点に関連して参考にしたのが、中屋敷千尋が報告するインド北部・ヒマラヤ高原に住むスピティの人びとによる、SNS や電話のやりとりの様式である。一般的には、スマートフォンなどのモバイル・メディアを介したメールやメッセージを相手に送信する際、受信する相手の現在の状況——「オンライン」であるかどうか——は特段気にされることはない。相手の都合の良いタイミングでメールを開いてくれればそれでよいし、急いで返事が欲しい場合は追加でメールを送信したり、ときには電話をかけたりすることも可能である。他方、スピティの人びとは、送受信側双方が「オンライン」のときのみ連絡をしてくるのだという。「スピティの人々と SNS で接していると、あたかも相手オンラインのときに電話ないしメッセージを送らないとやりとりしたことにはならない、あるいはメッセージを送受したことにならないかのように感じられる」（中屋敷, 2020 p.297）と中屋敷は述べる。つまり、SNS やモバイル・メディアを介して他者と関わる際の態度は、対面での直接的なやりとりと地続きにあるということだ。「対面の関係では彼らが筆者に同じ空間にいるよう促し、そこで一緒に時間を過ごしおしゃべりするように、SNS 上でも彼らは、私が彼らと「同じ時」を過ごし、彼らにす

ぐに語りかけられる状態のときに話しかけてきていたのである」(中屋敷, 2020 p.301)。

中屋敷の興味深い報告は、ともに各自の端末に向き合い、同じSNSを見ていることがある種の「共に在る感覚」をもたらす可能性を示唆している。それは対面的なコミュニケーションと連続性がある場合もあれば、オンライン上特有の文脈を色濃く反映する場合もあるだろう。当初は戸惑いながらも、中屋敷のようにオンライン上のコミュニケーションのありようを見出していくことや、その作業を端末の画面内にいる他者と「ともに」進めていくことができる可能性は残されている。こうしてみると、オンラインインタビューに関する既存の方法論的な検討は、調査者側に必要なテクニックや技術的インフラに関する議論に偏っているようにも思われてくる。そこでは調査者と被調査者との共同／協働作業としてのオンラインインタビューの側面が後景化し、画面上の他者「について」の調査となってしまっているのではないか。いま必要なことは、状況に他者と「ともに」向き合うことを前提とした方法論的模索であるだろう。

フィールドという具体的な場に物理的に行くことができずとも、自己と他者とのオンライン上の共同／協働のなかで互いのコミュニケーションのあり方を新たに作り上げていくことは、可能なのではないか。そうした試行錯誤は、〈居合う〉構えにもとづいて実践される限りにおいて、フィールドワークと不可分な営みとなる。いま必要なのは、フィールドを〈手前に引き延ばす〉ことであり、オンライン上でのファースト・コンタクトにおける葛藤や失敗、試行錯誤すらも内包するようなフィールドを新たに——他者ととともに——立ち上げていくことである。〈居合う〉構えとは、このようにして目の前の事態を何かの出発点として捉えかえし、目の前の現実をフィールドへと変容させようとする態度にほかならない。

注

- 1) 本稿は、2021年3月20日に立命館大学人文科学研究所が主催した研究会「COVID-19時代におけるフィールドワークの(不)可能性——されどわれらが日々のフィールドワークは可能か?」(重点プロジェクト「グローバル化とアジアの地域」)にて報告した内容をもとにしている。
- 2) 人類学的フィールドワークについての筆者のこの説明は、公益財団法人日本証券奨学財団の同友会誌『証券奨学同友会』第45号に寄稿した筆者の研究紹介文に微修正を加えたものである(石野, 2019 pp.10-11)。なお、本稿では敢えて「文化人類学的フィールドワーク」と「フィールドワーク」、そして「参与観察」を厳密に区別して記述することはしない。それゆえ、フィールドワークをめぐる記述に一定のあいまいさが残されている。ただ、文化人類学という筆者の依拠するディシプリンの域を出ないかたちで、フィールドワークという方法論の質的強度を確認しようとしたり、でっぴあげようとしたりすることは本稿の目的ではない。フィールドワークは多様な分野において方法論として活用されてきており、それらは「生き方としてのフィールドワーク」という次元へと拡張しつつある(中尾・杉下, 2020 pp.5-12)。そのなかにおいて文化人類学的なフィールドワークがなおも有する独自の要素について(それが本当にあるのか、という批判的な視点も含めて)検討を深める作業は必要であろうが、それは本稿とは別の場所にて試みたい。
- 3) 箭内匡(2018)によるフィールドワークの説明を意識している。箭内はエドワード・エヴァンズ＝プリチャードから、人類学的フィールドワークの身体性に関わる根本的な価値を読み解いている。「フィールドワークの価値は獲得したデータの量で決まるのではない、ということだ。何よりも大事なのは、自分自身の身体をフィールドに慣れさせ、その身体を土台として、新しい視点——まさに民族誌的フィールドワークを行うことがなければ決して到達できなかったような視点——から物事を考えてゆく能力を獲得することなのである」(箭内, 2018 p.45)。
- 4) 追加者の明示がないものはLupton 本人による説明だと思われる。なお diaries については Bartlett and Milligan (2015) が、また photo elicitation は Harper (2002) や、日本語で読めるものでは門田・小西(2018) などがある。elicitation は、単に被調査者自身に自己観察・自己開示をしてもらうものというよりは、写真やビデオ——それを用いた撮影行為を、撮られたものを被調査者が見直すことを、調査者とシェアする際の振り返りを——通じて、被調査者に何かを「喚起」させる、その瞬間を観察しようとするものであるといえる。
- 5) Mark Wong による加筆。
- 6) F. Güzin Agca-Varoglu による加筆。
- 7) Robin Smith による加筆。
- 8) 佐藤知久は、プロニスラウ・マリノフスキによって体系化された、特定の「社会/文

化」を対象とした長期的フィールドワークを「フィールドワーク 1.0」と呼び、彼が「フィールドワーク 2.0」と称する現代の文化人類学的フィールドワークと区別している（佐藤知, 2013）。

- 9) 西井涼子は、「人はみなフィールドワーカーである。ただそのことに気づきさえすれば、人々の生活が新鮮な発見の場となり、驚きと愉しさに満ちたものになる」（西井, 2014 p.12）と述べている。
- 10) 文化人類学の優れたテキストである浜本満・浜本まり子編『人類学のコモンセンス——文化人類学入門』（1994）から借用している。
- 11) 本書は、1967年に中央公論社から刊行された『世界の名著 59 マリノフスキー レヴィ ストロース』に収録された「西太平洋の遠洋航海者」（寺田和夫・増田義郎訳）を、訳者の一人である増田が再編集したものである。
- 12) 〈居合う〉構えは、「居合い道」「居合い切り」から着想を得ている。流派ごとの見解と定義があるだろうが、居合いは敵と居合わせ、不意に襲撃された際にうまく対応する技術という意味合いを持つ。言い換えれば、つねに周囲に対して自己を準備しつづける姿勢である。
- 13) ただし、すでに言及した箕曲・二文字屋・小西編（2021）が問題意識とするように、「グローバル水準」や「主体的で対話的な学び」が学術指導・教育の文脈に浸透しつつあるなかで、単一の「答え」や特定のスキル習得といった明確なゴールの用意された学習との対比として、偶発性や自己変容、あるいは学生による学生自身の自己省察の機会を豊かに考察していくことは重要な作業であると思われる。本稿が偶発性や自己変容という言葉について批判的なのは、そうした「手段」が目的化するような場合である。
- 14) Ingoldがいう with のニュアンスを援用し、「パンデミックとともにある人類学」について検討したものとして、浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編（2021）がある。
- 15) オンライン上の交流が誰にでも即座に実践可能なものでは必ずしもないことは、自覚的である必要があるだろう。すでにフィールドで一定の滞在経験があること、フィールドに知人がいること、誰かからフィールドの人びとを紹介してもらえたこと。そうした「資本」を抜きにしたとき、ゼロからオンライン上で関係性を構築することは容易ではないと思われる。「いざ現地調査へ」という段階で新型コロナウイルス感染症の影響に見舞われたフィールドワーカーがいることを想起したとき、小川の語りから「先行者有利」と呼べるような状況を読み取ってしまうことも事実である。
- 16) 浜本（2005）および Malinowski（1922/2010 増田訳）。
- 17) 佐藤郁哉が次のように述べていることは重要だ。「ある意味では、最もフィールドワークに向いていないのは「フィールドワーク至上主義者」や狭い意味での「現場主義者」だと言えます」（佐藤郁, 2006 p.20）。ここでは統計やアンケートといった他の調査手

法を軽視しフィールドワークにのみ可能性を見いだそうとするような調査者が批判されているわけだが、「現場」にのみ希望を見いだすことの課題と、本論文が論じてきたフィールドワークの理論的な拡張性の議論には、交差する点があるように思われる。

- 18) 人類学者の土井清美はこれを「フィールドの内外ではなく遠近」という言葉で説明している(土井, 2021 p.285)。
- 19) この、行為を〈手前に引き延ばす〉という視点は、「側坐核」(Nucleus accumbens) と呼ばれる脳内の神経細胞と「やる気」との関係に関する、以下の説明から着想を得た。池谷裕二と糸井重里による対談『海馬——脳は疲れない』(池谷・糸井, 2005)によれば、人間が何かの「やる気」を出し、集中力を持って行為に取り組むためには、左右の脳の一つずつある側坐核が刺激され、それが海馬と前頭葉に信号を発し、アセチルコリンという神経伝達物質を送りださなければならない。だが肝心のこの側坐核は、事前に一定の刺激を受けなければ活動を開始しないのだという(池谷・糸井, 2005 pp.207-212)。つまり、「やる気を出す」ためには、とにかくやる気を出したい行為を——やる気の出ないままに——開始するほかないということになる。この説明を読んで絶望しながら筆者は、スポーツ選手などが行う「ルーティーン」と側坐核との関係性を想起していた。たとえば野球の場合、バッターが打席に入る前に屈伸したり、手袋のベルトをなおしたりする所作を毎回繰り返している姿を見ることがあるだろう。これは「打席でピッチャーから投げられた球を打つ」という1秒にも満たない一瞬に最大限の集中力を引き出すために、特定の行為を毎回、同じ回数、同じように行うことでリズムをつくり、自身の集中力を高めた状態でバッティングをするための行為だ。このルーティーンという営みは、もしかするとバッティングという一瞬の行為を〈手前に引き延ばし〉、屈伸や手袋のはめなおしといった一連の行為をもバッティングという行為のなかに引きこむことなのではないか。つまり、屈伸とバッティングは、ひとつの連続した行為として立ち上がっている。そのような思考に至ったとき、フィールドワークという、フィールドに規定された営みをその前後に〈引き延ばす〉ことの理論的な可能性についての着想を得た。

参考文献

- Bartlett, R., and Milligan, C. (2015). *What is Diary Method?* London, UK: Bloomsbury.
- Butler, J. (1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York, US: Routledge. [竹村和子訳 (2018) 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版』 青土社]
- 土井清美 (2021) 「スペインの巡礼路を歩く旅——現象学的フィールドワーク」市野澤潤平・碓陽子・東賢太郎編『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』(pp.271-289) ミネルヴァ書房

- 浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編 (2021) 『新型コロナウイルス感染症と人類学——パンデミックとともに考える』水声社
- 浜本満・浜本まりこ編 (1994) 『人類学のCOMMON SENSE——文化人類学入門』学術図書出版社
- 浜本満 (2005) 「村のなかのテント——マリノフスキーと機能主義」太田好信・浜本満編 『メイキング文化人類学』(pp.67-89) 世界思想社
- Harper, D. (2002). Talking about pictures: a case for photo-elicitation. *Visual Studies*, 17 (1), 13-26.
- 細見俊 (2021) 「他者像を完成させない——国際協力で揺らぐ自己の先に見えたもの」桑山敬己編 『人類学者は異文化をどう体験したか——16のフィールドから』(pp.26-42) ミネルヴァ書房
- 市野澤潤平・碓陽子・東賢太郎編 (2021) 『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』ミネルヴァ書房
- 碓陽子・市野澤潤平 (2021) 「フィールドワークの事前準備」市野澤潤平・碓陽子・東賢太郎編 『観光人類学のフィールドワーク——ツーリズム現場の質的調査入門』(pp.3-16) ミネルヴァ書房
- 池谷裕二・糸井重里 (2005) 『海馬——脳は疲れない』新潮社
- Ingold, T. (2013). *Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture*. Oxon, UK: Routledge. [金子遊・水野友美子・小林耕二訳 (2017) 『メイキング——人類学・考古学・芸術・建築』左右社]
- . (2018). *Anthropology: Why It Matters*. Cambridge, UK: Polity. [奥野克己・宮崎幸子訳 (2020) 『人類学とは何か』亜紀書房]
- 石野隆美 (2019) 「長崎からマニラへ——研究の紹介」『証券奨学同友会報』(45), 10-14.
- 門田岳久・小西公大 (2018) 「フォト・エリシテーションを用いた教育と社会実践——宮本常一写真を通じた佐渡の開発／観光史研究から」『立教大学観光学部紀要』(20), 40-53.
- 桑山敬己編 (2021) 『人類学者は異文化をどう体験したか——16のフィールドから』ミネルヴァ書房
- Lupton, D. (Ed.). (2020). *Doing fieldwork in a pandemic* (cloud-sourced document uploaded on March 17, 2020). Retrieved August 29, 2021, from <https://itustudent.itu.dk/~media/itu-student/news-frontpage/doing-fieldwork-in-a-pandemic-pdf.pdf?la=en>.
- Malinowski, B. (1967). *A Diary in the Strict Sense of the Term*. London, UK: Routledge and Kegan Paul. [谷口佳子訳 (1987) 『マリノフスキー日記』平凡社]
- . (1922). *Argonauts of the Western Pacific*. London, UK: Routledge and Kegan Paul. [増田義郎訳 (2010) 『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』講談社]

- 箕曲在弘・二文字屋脩・小西公大編 (2021) 『人類学者たちのフィールド教育——自己変容に向けた学びのデザイン』 ナカニシヤ出版
- 中尾世治・杉下かおり (2020) 「序論——生き方としてのフィールドワーク」 中尾世治・杉下かおり編 『生き方としてのフィールドワーク——かくも面倒で面白い文化人類学の世界』 (pp.1-24) 東海大学出版部
- 編 (2020) 『生き方としてのフィールドワーク——かくも面倒で面白い文化人類学の世界』 東海大学出版部
- 中屋敷千尋 (2020) 「「共に在る」感覚の再構成——チベット系民族の対面とモバイルメディアにおける関わり」 神本秀壘・岡本圭史編 『マルチグラフト——人類学的感性を移植する』 (pp.291-303) 集広舎
- 西井涼子 (2014) 「人はみなフィールドワーカーである」 西井涼子編 『人はみなフィールドワーカーである——人文学のフィールドワークのおすすめ』 (pp.12-33) 東京外国語大学出版会
- 小川さやか (2017) 「オートエスノグラフィに溢れる根拠なき世界の可能性」 『現代思想 特集エスノグラフィ』 45 (20), 123-137.
- (2019) 「SNSで紡がれる集合的なオートエスノグラフィ——香港のタンザニア人を事例として」 『文化人類学』 84 (2), 172-190.
- (2021) 「エスノグラフィ」 春日直樹・竹沢尚一郎 『文化人類学のエッセンス——世界をみる／変える』 (pp.239-257) 有斐閣
- 佐藤郁哉 (2006) 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう 増訂版』 新曜社
- 佐藤知久 (2013) 『フィールドワーク 2.0——現代世界をフィールドワーク』 風響社
- 澤柿教伸・椎野若菜 (2020) 「イントロダクション——フィールドワークの安全対策」 澤柿教伸・野中健一・椎野若菜編 『フィールドワークの安全対策 (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ 9)』 (pp.4-11) 古今書院
- 椎野若菜・白石壮一郎編 (2014) 『フィールドに入る (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ 1)』 古今書院
- 菅原和孝 (2006) 「人生至る所フィールドあり——まえがきにかえて」 菅原和孝編 『フィールドワークへの挑戦——〈実践〉人類学入門』 (pp.1-8) 世界思想社
- 箭内匡 (2018) 『イメージの人類学』 せりか書房